



引揚げ文学から触れる「ソ連侵攻」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学釧路校国語科教育研究室 公開日: 2025-03-13 キーワード: 作成者: 小長谷, 祥治 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000429

「引揚げ文学から触れる『ソ連侵攻』」

一 はじめに

二〇二二年にロシアがウクライナへ侵攻を始めてから、未だ収束を見ない状況である。侵攻当初は連日ニュースで盛んに報道されたが、時間の経過と共にその量も減少している。本校生徒たちも当初は話題に挙げていたが、現在ではすっかり関心が薄れているように見受けられる。

一方で、日本もロシアとの間に終戦期より続く領土問題を抱えており、ウクライナ降伏の先には日本の危機が現状よりも悪化する」とが懸念される。

併せて後述するように、平和学習において日本とソ連の関係に対する理解度が日米関係に較べて、甚だ低いことが大きな課題として挙げられる。

その中で本稿は、引き揚げ文学を見直すことを通して、終戦前後の日ソ関係の把握と理解を深化させる教材としての価値を見出すことを試みたい。

二 平和教育の課題

平和教育における喫緊の課題として、将来的に戦争経験者が不在となることが懸念される。日本は終戦以来およそ八〇年、実体験を基に戦争の様子を後世に伝えられる者の高齢化が進むと共に、年々減少している。いずれ戦争を経験した者が不在となった場合、戦争の直接体験が無い我々は日本国民の一人として、何を根拠に平和を維持し続けることが出来るのかが大きな課題となる。

小長谷祥治

他方で平和教育に実感が欠けている要因として、世代間による「戦争観の揺らぎ」が挙げられよう。『太平洋戦争への道1931―1941』では、世代による「戦争観の揺らぎ」について、次のように言及している。

私たちの国は、日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦、満州事変というように、ほぼ十年おきに近代戦争を戦つてきたが、すべて外地での戦争です。一九四四年(昭和十九年)の十一月から米軍による都市爆撃が始まり、そのときに初めて多くの人が戦争を肌で実感します。

このことから限定的な体験では、「戦争観」への想像力不足、考えの幅が狭いと指摘している。

また、『戦後日本教育史』^二では、日本の「戦後」の大きな特徴は、終戦を機に戦前との「断絶」を強調したことであると言及している。この断絶が「戦前＝悪、戦後＝善」という歴史解釈を伴うもので、実証的に歴史事実を説明しようとする姿勢を弱め、政治的イデオロギー対立の文脈にたやすく回収される危険を内在化させたと分析している。その上、教育分野でこそ、この歴史解釈が強固に共有されたことで、歴史の事実を実証的かつ批判的に考え、そこから学ぼうとする姿勢を失うことに繋がっていると指摘している。

戦後の平和教育において後述のWGIPを始めとするGHQ政策による数々の制限により、国民一人一人が戦争について客観的・多

角的・批判的に考える機会や十分な知識・理解を深めて来られなかったことが、現在の平和教育の課題に直結していることは明らかである。

三 先行授業実践の成果

拙稿『流れる星は生きている』教材化の可能性——高校生の平和学習と主権者教育への足がかり——^三では、高校の授業で引き揚げ文学を教材化することの可能性を論じてきた。この中で高校生への事前アンケート結果から、現状の平和教育の課題として、次の四点が挙げられた。

- i 第二次世界大戦について、義務教育段階における平和学習や、高校の日本史で扱っているにも関わらず、知識や関心が低い。
- ii 回答には抽象的なイメージが目立ち、具体性に欠けていることがうかがえる。
- iii 終戦については知っているものの、開戦についてはほぼ把握できていないのが現状である。
- iv 戦時中を舞台にした作品を鑑賞していてもイメージが繋がらず、戦争についての理解が十分であるとは言いがたい。

以上を踏まえた上で、授業実践では引き揚げ作品を読み進める中で、ベータ読み^四を意識させた。その結果、軍人視点(軍人同士の争い)で捉えていたものから、一市民の視点で物語を想像・読解することに繋がった。これまで未知であった内容を自己と照らし合わせることを通して、より現実的に「戦争」について考える一端となることが成果として期待された。

四 引き揚げの発端

一方で、引き揚げについて考える上で、満州国から引き揚げる要因となった『ソ連侵攻』についての認知度が低いことは見逃せない要素である。藤原てい氏の著書『流れる星は生きている』と『旅路』では、重なる内容の中にもソ連兵に対する記述に落差が見られる。

特に『流れる星は生きている』では、「ソ連侵攻」について明記されておらず、後に出版された『旅路』や次男である藤原正彦氏の著書『祖国とは国語』等を併せて読むことで、その実態を補充する事ができる。

例えば作品冒頭で夫が召集を受けた際に「来る時が来たようだ」と言ったことに対し「来る時が来たのね」と返す場面がある。例年生徒たちにとつては、何が「来る」のが不明確となりがちであるが、その正体がソ連軍であることがわかれば、「私」たち日本人団がなぜ南下することになったのかという根本的な経緯の理解に繋がることができる。

父は、新京が戦禍に巻き込まれる前に立ち退く、というのが上部からの命令であり、関東軍の家族につづいて政府職員の家族も新京を出発する、と手短かに説明した。

この日の午前零時をもって、ソ連軍が、日ソ中立条約(不可侵条約)を破り、怒濤のごとく満州へ侵攻したのである。兵員百七十四万、自走砲を含む戦車五千台余り、飛行機五千機余り、という驚くべき兵力が、東、北、西、の三方向から進撃してきた。

相対する関東軍は、主力部隊を南方にもつていかれ、飛行機は二百機余り、戦車部隊はなきに等しかった。七十万余りの兵員の三分の一は、「根こそぎ動員」により召集された在満日

本人で、うち十万人ほどは小銃さえ持っていなかった。

ソ連の侵攻を父は政府職員として伝えられていたが、母には余計な恐怖を与えぬため知らさなかった。

『祖国とは国語』

また『流れる星は生きている』の中で「私」は極度にソ連兵を恐れている描写が見られる。しかしながら『旅路』では、その内容に大きな乖離が見られる。『流れる星は生きている』では、人形作りの材料をソ連兵たちが融通してくれたら、顔見知りのソ連兵が主人公たちのもとへ遊びに訪れたり、友好的な描写に留まり、被害を受ける場面は皆無である。唯一売り物の人形にイタズラをされるが、結果的には買ってもらえており、遺恨を残すことはない。

一方、『旅路』では、査収の名目で度々日本人団の小屋を訪れては、女性と子どものみの団体に対して、発砲や掠奪や拐かしを繰り返しており、「私」がソ連軍の所へ交渉に訪れた際にも、日本人家族が殺されたであろう痕跡を目の当たりにする。

特に『流れる星は生きている』では、ある日本人女性が心身の疲労困憊の末に発狂した(後に完全復活する)話があるが、『旅路』内の同様の話ではソ連兵に攫われた女性が解放されて帰還した際に発狂するという点で大きな差異が見られる。

先行研究内では、『流れる星は生きている』でこれらのあまりにも凄惨な出来事が省略されているのは、やはり子供たちへの(いざという時に)勇気づけるための「遺言」であるという特性上、仕方の無いことであろうと結論づけた。

しかしながら、「ソ連侵攻」が引き揚げ経験者に甚大な影響を及ぼしたことは、藤原正彦氏の著書において、父である新田次郎氏が次のように語っていた内容からも留意するべきであろう。

混乱の中で脱出した満州の地を訪れることは、長い間、私の夢であった。父の生きていた頃、家族で訪れることが話題になることも再三あったが、いつも父の拒絶で話は頓挫した。妻子と別れた後、ソ連兵に強制連行された父は、共産主義下のソ連や中国に足を踏み入れるや、再び収容所へ連れていかれる、と終生、本気で信じていた。

半ばあきれた私が、「もう何十年もたっているんだよ。それに名の通った日本の作家を連行するようなことがあったら国際問題になる」と言っても、「奴等の言うことだけは誰がどう言おうと絶対に信用しないぞ」と厳しい表情で言い張った。

『祖国とは国語』

引き揚げ経験者にとって、生涯にわたりトラウマとして心に深い傷を負わせた契機である「ソ連侵攻」を、作中では、「来るとき」と曖昧に記述されていることや、ソ連兵の跋扈する様子が描かれていない点に疑問が生じる。

なお、夫が連行される場面も『流れる星は生きている』と『旅路』では差異が見られる。前者は「駅の人(国籍不明)」から駅へ集合するよう伝えられ現地地隊の保安隊が迎えに来る。しかし、後者ではソ連兵から直接伝えられる。

五 「ソ連侵攻」に対する低認知

授業実践に際して、事前アンケートで「第二次世界大戦で日本敗戦のきっかけ」を尋ねたところ、回答の大半が「原子爆弾投下」であった。生徒たちの間では対米の印象が中心で、ソ連についての言及は皆無であり、終戦前後における日ソの関係性の理解が十分であると

言いがたい現状である。

その要因として、有馬哲夫氏が言及^五している、GHQによる日本の戦後占領政策の内、次の二点が現在に至るまで大きく影響していると考えられる。

一点目に、ポツダム宣言第十条「言論の自由」を破りプレスコードによる情報操作をおこなったこと。プレスコードには検閲に関する言及^六の項目があり、検閲についての言及を許さないという検閲が存在した。それにより、当時ソ連の満州侵攻・領土奪取・大量虐殺についてもプレスコードにより封殺されたというものである。

二点目に、ソ連に対する戦争犯罪の扱いについてである。有馬氏は終戦間際に日ソ中立条約に違反し、米英の合意を得ずに満州侵攻したことは疑いの余地なく「戦争加害国」の立場であると述べている。しかし、極東国際軍事裁判では「戦争被害国」の立場とされる。その理由として、日本は一九四二年にソ連に対する「侵略戦争の国際的陰謀」があつたとし「平和に対する罪」の共同謀議として、ソ連は「被害国」という扱いであつた。一方でヤルタ会談において、ソ連が南樺太、千島列島、満州での権益と引き換えに日ソ中立条約を破り満州侵攻を決めたことこそ「侵略の共同謀議」であると指摘している。加えて、これらの影響が現在の北方領土問題に繋がっているとも言及している。

以上を踏まえると、前項の二作品に見られるソ連兵に対する記述の落差について、『流れる星は生きている』の初版は一九四九年であることから、先述のプレスコードが「ソ連侵攻」や「シベリア抑留」の詳述を妨げる一因となつたとみる解釈に適用ではないだろうか。

六 「終戦」全て終わり、ではない

先の授業実践の事前アンケートでは、戦争について具体的なイメ

ージを持ってない中で、単純に「多くの人が犠牲になる」という回答が目立ち、それらはいくまでも戦場での話としての認識であつた。

事後アンケートにおいて、生徒たちは引き揚げ文学を読むことを通して、歴史上の転換期としての「終戦日」とその実際との乖離を実感する機会となつた。

それまでは終戦日を迎えたことによつて「戦争が全て終結した」と考えていたことから、開拓団の日本人たちにとっては、引き揚げという新たな戦いの幕開けであつたことが理解できたようである。時代や情勢に翻弄される無辜な一般市民の視点で物語を捉えられるようになったことが看取された。

開拓民たちにとつて、ソ連侵攻に伴う急な南下は、それまでの暮らしを一変させた出来事であつた。同様に現代の我々も有事の際には、同じような感情を持つことになるのではないだろうか。

ほんの二時間も前はあんなに平和に暮らしていた私たちが、
どうして急にこんな姿で星空を見なければならぬのだろう
『流れる星は生きている』

同じく引き揚げの実体験を記した、『1945 私満州脱出記』^六にも、「ソ連侵攻」によつて状況が一変し混乱する様子や、終戦後に日本人たちがどのような扱いを受けたかを記しており、「終戦」が全てを解決するきっかけではないことが読み取れる。

どの人を見ても、出発時の明るさは消え、すっかり意気消沈してました。子供を拉致された母親たちの狂わんばかりに泣き叫ぶ声が、胸に痛く突き刺すように響いてきます。

「私たちは悪いことなど何もしていないのに、何故こんな目に

合わなければならないのか」

そう自問しながら黙々と歩いて行きます。

この時、どれだけの子供が拉致されたのか知る由もありませんが、まさに目を覆うばかりの惨劇でした。

それでも私たちは彼等の傍若無人の行為に対して何一つ抵抗もできず、相手のなすがままでいなければなりませんでした。そんな不甲斐なき、口惜しさ——これが戦争の厳しい掟とはいえ、敗戦国の辿る惨めな姿なのです。

また露兵の婦女拉致が始まったのです。戦争はすでに終わっているはずなのに、まだこんな行為が公然と罷り通るとは……。いくら敗者の避けて通れぬ運命とはいえ、犠牲になる女性はいつの世も哀れなものです。これは、他人事では済まされません。

また、青森郷開拓団の引き揚げに伴う悲劇を藤原てい氏が取材し、小説化した『赤い丘 赤い河——十字架を背負つて——』という作品がある。巻末には満州開拓団の資料を筆者がいくつかの例として列挙している。その中には一般的に「終戦日」と認知される八月一日以降の被害も数多く記されており、それぞれの開拓団が数百名単位でソ連兵や現地住民による襲撃を受け「虐殺」「戦死」「全滅」を被ったり、「自決」に至ったりしたとの記述が列ぶ。それら詳細については次の文が参考となるだろう。

昭和二十年六月の根こそぎ動員により、壮年の男たちはみな召集されていたから、入植地に残る開拓民二十七万名のほとんどは女、子供、老人だった。村落ごとにとまてつて徒歩や

馬車で避難を始めたが、ソ連機甲部隊の急進撃で多くの犠牲者がでた。

ぞろぞろと長い列を作り避難する難民たちに、丘の上から一斉射撃を浴びせる、などという無慈悲ぶりだった。

獸のときソ連兵による虐殺、略奪、強姦は怖るべきものだった。絶望の中で、数十人、数百人単位の集団自決が相次いだ。父親が泣きながらわが子そして妻を撃ち、最後に自らの命を断つ、というような光景が随所に見られたという。

八月十五日に日本がポツダム宣言を受諾し、二日後に大本营から武装解除の命令が出て、避難民も武装を捨ててからは、少しでも占領地を増やそうと進撃を止めないソ連兵に加え、中国人が暴民と化して丸腰の開拓団を襲い、物品を強奪した。集団自決の遺体から衣服を剥ぎとることまでした。

『祖国とは国語』

現在も戦禍を被る諸外国の様子について、高校生もニュースやインターネットを通じて目の当たりにする機会があるだろう。引き揚げ文学を読むことで、単に「終戦」を願うことに留まらず、その先に起きるであろう事態や問題解決の難しさを考える一端になりえよう。

七 引き揚げ文学と温故知新

有馬氏は日本の「戦後の反省」について、日本国民の自発的な考えではなく、戦勝国による力を伴った命令であることを指摘している。そのような現状を鑑み、日本国民がかつて敗戦国民として経験した現実を知り、追体験や共感を経た上で、一人一人が自分自身の問題として、平和を考える機会が必須であると考ええる。

現在も世界各地で戦火が絶えない中で、平和教育教材として引き揚げ文学に触れることを通して、戦争終結後に敗戦国が辿る道を体験することに、教材としての価値や意義を見出し、いきたいと考えている。殊に引き揚げに際しては、日ソ不可侵条約の一方的な破棄や領土侵犯、シベリア抑留を始め一般市民への筆舌に尽くしがたい行為の数々、そしてそれらが戦勝国の都合で黙殺されるといった、国際的なルールの形骸化の歴史を、現在も日夜報道されるニュースや今後の世界情勢と照らし合わせていくことが求められるだろう。

実状を十分に把握や理解しないまま、根柢の無い「平和」を語ることから脱却することが必要ではないだろうか。一度戦争が始まれば、例え形ばかりの「終戦」を迎えたとしても、一般市民たちには別の戦いが起きる危険性があることは留意しなければならない。

八 まとめ

以上、平和教育に取り組む上や引き揚げ文学に触れる中で、「ソ連侵攻」や「シベリア抑留」をはじめとする当時の日ソ関係に対する理解に乏しい現状を起点に、その実態の把握や歴史認識が必要であることを述べてきた。

「ソ連侵攻」は日本人が引き揚げを行うに至った契機であったことから、引き揚げ文学を学ぶ上では切り離せない問題である。加えて、その禍根が現在も領土問題として両国間に根深く残っていることから、「終戦」によつて必ずしも全てが終わる戦争問題が解決する訳では無いということを考えなければ、真の意味での平和学習は成し得ないと言えよう。

今後の平和教育には、遠い時代・別の世界での出来事と捉えるのではなく、自身も当事者となる可能性が十分にあることを自覚し

た考えを持つことが求められよう。

【注】

- 一 半藤一利 加藤陽子 保阪正康『太平洋戦争への道 1931—1941』NHK出版新書 二〇二二
- 二 貝塚茂樹『戦後日本教育史「脱国家」化する公教育』扶桑社新書 二〇二四
- 三 『流れる星は生きている』教材化の可能性 — 高校生の平和学習と主権者教育への足がかり — 『信大国語教育第三〇号 二〇二二』

四 外山滋比古氏は「既知の読み」である「アルファ読み」に対して、未知のことごらの文章を読む場合を「ベータ読み」と称している。「ベータ読み」には、思考力・想像力が必要で、自分の頭を使って解釈する必要があることから、文字から未知を読み取ることで、本當の読みに繋がると述べている。

五 以下、有馬氏の言及については、有馬哲夫『日本人はなぜ自虐的になったのか 占領とWGIP』新潮新書 二〇二〇を引用・参考にしている。

六 稲毛幸子『1945わたしの満州脱出記』ハート出版 二〇二二

【引用・参考文献】

- ・有馬哲夫『日本人はなぜ自虐的になったのか 占領とWGIP』新潮新書 二〇二〇
- ・稲毛幸子『1945わたしの満州脱出記』ハート出版 二〇二二
- ・貝塚茂樹『戦後日本教育史「脱国家」化する公教育』扶桑社新書 二〇二四

- ・加藤陽子『それでも日本人は「戦争」を選んだ』新潮文庫 二〇〇九
- ・小長谷祥治『流れる星は生きている』教材化の可能性 ―高校生
の平和学習と主権者教育への足がかり― (信大国語教育第三〇
号 二〇一二)
- ・小長谷祥治『流れる星は生きている。夫の行方を探る』長野県国
語国文学会紀要第一四号 二〇一二
- ・末益智広『藤原てい』流れる星は生きている『灰色の丘』をめぐる
「引揚げ」の記憶 (千葉大学大学院人文 公共学府 二〇一八)
- ・新田次郎『望郷・はがね野郎 新田次郎全集第九卷』新潮社
一九七五
- ・新田次郎『小説に書けなかつた自伝』新潮社 二〇一二
- ・半藤一利 加藤陽子 保阪正康『太平洋戦争への道1931―194
1』NHK出版新書 二〇二二
- ・廣瀬和二『日米の教科書 当時の新聞でくらべる太平洋戦争』辰
巳出版 二〇一五
- ・藤原咲子『母への詫び状 ―新田次郎、藤原ていの娘に生まれて』
(山と溪谷社 二〇〇五)
- ・藤原咲子『父への恋文』山と溪谷社 二〇一三
- ・藤原咲子『チャキの償い ―新田次郎、藤原ていの娘に生まれて』
(山と溪谷社 二〇一五)
- ・藤原てい『流れる星は生きている』日比谷出版社 一九四九
- ・藤原てい『赤い丘 赤い河―十字架を背負って―』(修道者 一
九七一)
- ・藤原てい『流れる星は生きている』中央公論新社 一九七六
- ・藤原てい『旅路』中央公論新社 一九八六
- ・藤原てい『わが夫 新田次郎』新潮社 一九八一

- ・藤原てい『限りなき日々』家の光協会 一九八一
- ・藤原正彦『祖国とは国語』新潮文庫 二〇〇三
- ・藤原正彦『ヒコエ』新潮文庫 二〇一〇
- ・藤原正彦『日本人の真価』文春新書 二〇二二
- ・藤原美子『夫の悪夢』文春文庫 二〇一二

(一)ながや よしはる 長野俊英高等学校